水城の構造

1 太宰府の防衛施設・水城

日本書紀によれば、「筑紫に大堤を築き水を貯え、名を水城という。」とあり、天智天皇3年（664）に水城が築かれたことが分かります。百済の救済を目的とした、朝鮮半島における白村江の戦い（663）に敗れた時の日本にとって、太宰府を中心とする防衛施設として大野城や基盤城と共に造られました。

水城は、福岡平野から筑紫平野へ抜ける際、平野が最も狭くなる場所を遮断した、長さ約1.2kmの土塁です。土塁の基底部の幅は約80mあり、残る良好的ところで基底部からの高さは約8m程度です。また、発掘調査によって博多側に約60mの外塁が、太宰府側に内塁があったことが分かります。さらに土塁の東西には門があり、特に西門は博多湾岸に設かれた筑紫館より延びる官道を通っていたことが、周辺の調査でも確認されています。また、水城大堤の西側には、丘陵の谷部を塞いだ小水城と呼ばれる土塁が大野城・春日市で幾つか確認されています。特に史跡水城跡は、福岡県太宰府・大野城・春日市とに所在する大堤と小水城とを併せて呼んでいます。

2 水城の構造

古代の防御施設・水城の構造については、九州歴史資料館や太宰府市・大野城市・春日市の発掘調査によって明らかにされています。ここでは、水城の構造を考える上で特に重要な、土塁と塁について見てみたいと思います。

1）土塁

水城の土塁は断面でみると、上下二つに分かれていてることが分かります。これを下層土塁、上層土塁と呼んでおり、発掘調査ではそれぞれ土塁の積土が異なることが確認されています。沖積地に築かれた水城の下層土塁は、厚さ30cm程度の間隔で積まれています。そして下層には、軟弱な地盤を補強するために敷粗石とよられる樹木を敷き詰めていることも確認されています。これは、朝鮮半島の百済の起源とされる古代の土木技術です。これに対して、上層の土塁は、粘土土や真砂土を厚さ10cm程度で固くたたきをしています。調査では突き固めた棒の痕跡も確認されています。
2）外濠

「水を貯えしむ」と言われた水城の貯水機能は、古いより議論されてきました。長大な土塁については、敵の進入を塞ぐ城壁を見る考え以外に、背後に水を貯えるダムとする考えがありました。発掘調査では、土塁前面となる博多湾側幅約60m、深さ約4.5mの外濠が確認され、論争は一応の決着を示しました。そして、土塁に埋設された木棧と呼ばれる導水管によって、内濠から外濠に水を注ぎ込んだと考えられています。ただし、中央を流れれる御室川に向かって地形がおちていくことから、外濠にも「構造」のように段々に水を貯める構造が想定されていますが、調査では確認できており、まだ謎の部分も多いのです。

3 水城の木棧

1）木棧

水城の濠に水を貯める導水管の役割を果たしたのが木棧です。下成土塁の幅約80mに亘って埋設されていることが発掘調査で確認されています。木棧は、幅70cm、厚さ26cmの板状に加工した底板材を2枚つないで鉄製の釜で留めています。そして、高さ80cmの側板を左右に立て、箱形にしています。その上に、幅40cm程度の板状の木蓋をして埋めていたようです。現在までのところ、水城のように大きな板材を錫でつないだ木棧は確認されていません。展示室では、この木棧の底板の半分を展示しています。

2）伝世した木棧

現在、展示している木棧の板材は、観世音寺に伝来していたうちの一つです。発掘調査で確認された木棧の構造も変わらず、釜の痕跡も見られます。ところが、この木棧はどのようにして発見されたのでしょうか。過去の記録を振り返ると、福岡藩の儒者、藤原益範が編纂した『筑前国経風土記』の「御室郡」に、「水城」中には、元禄年間に「大なる木」を掘り出したとあります。観世音寺に伝えられた木棧はこの時に掘り出されたものと考えられています。

（学芸調査室 杉原敏之）